



京都タロット宇宙のメサイージュ®

別冊！

京タロ指南書

めくるめくシンボリズムの世界

#01 はじめに

岩倉ミケ

奇想庵

目次

はじめに	
ごあいさつ	3
きっかけ	4
タロットとご縁	7
カード術の精神性と醍醐味	9

はじめに

ごあいさつ

こんにちは。奇想庵の岩倉ミケです。

先日（二〇二一年六月）、『京都タロット宙のメッセージの最初の指南書』（以下、京タロ指南書。もしくは指南書）を出版いたしました。指南書片手にカードを繰ったり、カードはなくても、指南書を読むなどで、はじめて京タロの世界に触れる方もいらっしゃるかと思います。

この『別冊！ 京タロ指南書』は、いわゆるムック版に当たります。こちらは、指南書をご覧ください。理解をさらに深めるためでもありますし、全くご存知ではない方も、ちょっと面白そう！と感じていただける読み物をお送りしたいと思っています。

無料で公開しますので、どうぞ、お楽しみください。

きっかけ

タロットカードとは、一般的には占いのツールとして知られています。しかし、ご存知の方も多いとは思いますが、本来、占星学や神話をよりどころとした、古代人の叡智と言ってもいいような奥深い世界観を背景に生み出されたカード術です。

はじめに、なぜ「京都タロット」なるものを制作しようと思いついたのかを、指南書とも重複しますが、簡単に述べたいと思います。

私の場合、本格的にタロットに触れ始めたのは17、8年くらい前から。夢日記を長年付けており、そのシンボルを読み解くという作業の中でタロットに行き当たりました。タロットカードの持つ壮大さと普遍性、物語性に魅せられ、夢という無意識下において、個人的な物語にいかに関係しているか発見するたびに、胸躍るような気持ちになったものでした。

私にとってタロットとは、日々の暮らしの根底にひそかに横たわる神秘性と、タロットの示すシンボリズムとの共振を愉しむツールです。なんだか難しい言い方になってしまいましたが、ひとことで言えば「内なる神話との遊び」と言えます。

「タロット占いができるんですか？」とよく問われますが、「占いというより、タロットをたしなんでいます」という答えを、私は好んで返します。タロットを「たしなむ」というのが、内なる神話との遊びのひとつの言い換えだからです。

さて、前置きはここまでにして、本題です。

なぜ、京都タロットなのか——？

それはタロットをたしなむ中で、タロットカードそのものが、飽くまでも西洋由来であることに違和感を覚え始めたからでした。もちろん日本人でも、西洋的な神話との関わりがないということはありませんが、タロットカードの宗教観が西洋的であることが、私の中で何だか「しっくり」こないようになってきたのです。タロットの裏付けとなる神話は、とても心ときめく、ロマンのある物語です。しかし、やはり日本人には、円卓の騎士の物語より八岐大蛇伝説やまたのおろちでしょうし、魔術師マーリンより菅原道真すがわらのみちざねや安倍晴明あべのせいめいをたどる方がより馴染みを覚えるはず.....。

そんな思いが、大好きなタロットを手取るたびに、湧いてくるようになりました。当時のわたしにとって、タロットを触れない日はありませんでしたし、とても大事に思っていたので、逆にちょっとした違和感が気になってしまったのかもしれませんが。

日本人向けの本格的なタロットを望む気持ちが強く、そのうちに「このカードが日本に転化したなら、これか...」というひらめきをメモするようになりました。そして、いつの間にか、そんな思いがノートにあふれるようになり、新しいタロットカードを作りたいというアイデアになりました。

構想を練り始めて二年ほどたった頃、東京で夢見のワークショップをさせていただいた時に、ポスターの画をいただいたご縁で画家の朋百香さんと知り合いました。日本のみならず各国の絵画展やコンテストで入選されるなど、国際的にも素晴らしい業績をお持ちなのですが、私はそのようなことも存じ上げないままに、彼女の絵を見た瞬間、この方に描いてほしい！と強く思いました。タロットカードは、言うまでもなく、その画こそ説得力を感じるものでなければなりません。カード画のイメージを明確に持っていた私は、温めていたアイデアを朋百香さんに打ち明け、厚かましくも、その場でお願いまでしてしまったのです。

「私も、この2、3年前から、ずっとカード絵を描きたいと思っていたんですよ」
朋百香さんは即答でした。

以来、たった一人での構想の世界から、朋百香さんと懇意にさせていただきながらの作業に変わりました。それからは、シンクロシティというものでしょうか、描いてくださっているカード絵にまるで呼応するように、お互いの暮らしの中の出来事が重なり合ったりして、不思議な共時性に導かれるように、朋百香さんはカード絵の作業を進めてくださいました。

当初、心がけていたことは、タロットの西洋的な世界観を損なうことなく、和の要素をふんだんに盛りこんでゆくこと。和洋折衷という言葉がありますが、まさに、それを目指していました。

さて、この本では、制作時の様々な出来事などを回顧することもあるかもしれませんが、新たに思いついたことなど、具体例を交えながら、京タロの世界感がわかりやすく腑に落ちるものを綴っていく予定です。

京都タロットがどのようなものなのかを感じとってくださったらいいな...という想いを込めて書いていきます。あなたの内なる神話がひも解かれるヒントになれば、本当に

うれしく思います。

タロットとご縁

先にこんなこと言うのも、どうかな？とは思いますが、だれもがこの言語を解釈したり学ぶ必要があるとは私は考えていません。表層意識に上らない言葉であるなら、それが答え。あえて種明かしをする必要などなくて、深層意識のことは深層意識にまかせておけばいいのです。それは、あなたがご自身の血液について、仮にヘモグロビンの作用を知らなかったとしても、全身に酸素を行き渡らせてくれていることと同じではないでしょうか。

ただ、なんのご縁なのか、この本を開いてしまったということは、何かしら心惹かれるものがあったということですから、この世界にパラレルに存在するシンボリズムの世界を、ちょっと垣間見たいという、ささやかな（そして無視し難い）欲求が、出てきたからかもしれません。

この本は、そんなあなたの小さな欲求を満たすヒントになるものを目指したいと思っています。

†

なぜ、私はタロットに魅せられてしまったのか…。そこに明確な答えを見つけることはできません。これは出会いでした。バイオリン弾きがバイオリンに出会ったような…。というのは、大げさでしょうか。でも私にとって決定的な出会いでした。日本風に答えるなら、縁でした。あれこれ理由を挙げることはできますが、それらは実際は後付けです。理屈で判断して、タロットを良しとしたわけではなかったと思います。

彫金師が指輪を作り出すように、あるいは大工さんが家を建てるように、私は構想し、朋百香さんがカード絵を描き、京都タロットは生まれました。先ほど、だれもがタロットを学ぶ必要はないと言ったのは、そのようなことです。だれもが大工さんになったり、彫金師になる必要がないのと同じことです。そこに現われたものを必要と感じ受け取った、そして何より、私自身がそれをするのが好きだったということです。

カード術の精神性と醍醐味

ほとんどのカード術は、そのカードを手にとったのは、あなたの「深層意識である」という前提があります。この偶然、偶発性を信じることは、ひょっとしたら迷妄を覚える部分かもしれません。しかし、タロットカードの精神性は、とにもかくにも、この一点から始まります。そこを迷妄と一蹴するなら、カード術というものはありえません。どうしても、その出発点が気になる方は、それでいいと思います。そのように信じなければ...なんて無理をする必要はありません。

私がこんな言い方をするのもなんですが、タロットカードなんてあってもなくても、あなたの人生は動いていきます。時は流れていきます。それでいいのです。先にも話したように、すべての人が彫金師になることもないし、大工さんになることもないし、タロットを繰る人になることもないのです。どんなものでもそのように、(ちょっと語弊のある言い方ですが...) タロットにハマること——これも、単に「縁」です。

ここからは、この一点を「ありえるのではないか」と感じている人のためにお話ししたいと思います。

この一点は、言い換えれば「宇宙への信頼」とも表現できます。それは次のような理由からです。

潜在意識と顕在意識のつながりを、「氷山の一角」の喩えを借りて、よく説明されますよね。その説明では、顕在意識は、海面に現れ出ている氷山の一角に過ぎず、海底においてつながりあっているすべての部分が潜在意識だと言われます。

カード術も、このあり方により成り立ちます。あなたが意識せずに手に取った1枚は、実は目に見えない潜在意識が手に取らせたもの...という考え方です。先の話に戻りますが、そこがどうしても馴染めないという人は、無理をしなくてもいいでしょう。ただ、多くのタロティストやカードマニアの方が、カード術に魅せられるところが、この点です。

これは、タロットを手に取り始めた人の多くが感じるのですが、タロットにたしなんでいるうちに、自分が手に取った1枚が「偶然ではない」という感覚を味わいます。その1枚が「やってきた」ことに、自分にしか感じられない「縁」を覚えるのです。

それはどこか、運命のフィアンセとの出会いにも似ています。「この人だ!」という思いと、「このカード!」という思い。この偶然性（いや、この場合「必然性」ですね）によって、タロットの魅力に引き寄せられます。この時、潜在意識のつながり、つまり「冰山の一角」の喩えが、単なる喩えではないことを味わいます。この「体感」を得られることが、タロットのひとつ目の醍醐味なんですね。

これが、潜在意識の存在を実感する、まぎれもない体験と言えるのではないのでしょうか。私は、このことがまずは、タロットをたしなむ者としての大切な感覚だと思っています。結果に囚われて一喜一憂するより先に、その一枚によって、それが肯定的なカードであれ、あるいはその逆を表したカードであったとしても、全体とつながっている一部としての自分を感じとれるよう導かれたのですから。この体感以上に大切な占い結果など、本質的にはないと私には思えます。（もちろん、各々にとって存在する問題は、それぞれに真剣であることは確かですから、そのためのタロット占いではあるのですが...）

先に、『宇宙への信頼』と述べたのは、このことです。すべてと繋がっている自分への信頼。

何だか、壮大なテーマのようですが、私は、究極のところ、人がこの地上で生きているのは、このテーマを体感するためではないかと考えています。生の中のすべての事柄は、このテーマを体感しえます。人が仕事をするこも、たとえば主婦が育児をするこも、その作業を通じて、これが可能だと思いますし、本来、タロットなんかより、そっちで体得するほうがずっと健全で「まっとう」であるはずです。

このことを考えると、タロットをたしなむというのは、多少なりとも欲深なこです。それ以上に「もっと」を求める行為とも言えるからです。私は欲深にも、何年も構想し、書きました。それがしたかったからです。これが実を結ぶか、否かなど何も考えずに、ここまできました。何のアテもないままでした。

先に述べたように、きっかけは西洋発のタロットに対する小さな違和感。当初は、それをスッキリさせたい一心でした。朋百香さんというこの上ない無二のパートナーを得て、京都タロットは結実しました。私たちがそうであったように、京都タロットは、おそらく多くの日本の人の、とりわけ日本女性の琴線に触れながら、あなたにしかない内なる神話を開いていくツールとなるに違いないと思っています。だから、この欲深を、どうか許して下さいね。

『別冊！京タロ指南書』# 01. はじめに (完)

[# 02 に続きます] (←無料)

『京都タロット宙のメッセージ 6 最初の指南書』のご購入は、こちらのページから→



QR \

別冊！京タロ指南書

著 岩倉ミケ

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
